
第 10 分科会 家庭科教育 2016

家庭科は現実にどう切り込んでいくのか

増淵 哲子（北海道教育大学札幌校）

I はじめに

2016年11月5日、6日の2日間にわたって行われた家庭科教育分科会では、計7本のレポートが提出された。道内各地からの参加者の自己紹介のあと、共同研究者の岩佐美和子氏による基調提案が行われた。いま、弱者同士の対立をあおる日常がひろがっている。合研は、さまざまな失敗を含めてお互いが実践を深め合う場である。こんなことを学ばせたい、こんなことをやってみた、子どもはこんな姿を見せた、こんなに生き生きと学んだ。そんな教師の思いを共有し考え合う機会としたい、対立ではなく交流をひろげよう、との提案があった。

以下では、各レポートの内容を中心に、参加者の声とともに紹介していく。

II レポートと討議

1. 家庭科における主権者教育の実践について

福間 あゆみ（北海道滝川西高等学校）

公職選挙法の一部を改正する法律の施行によって「18歳選挙権」が成立し、高等学校には、初めて多くの選挙権を持つ生徒が在籍することになった。社会科では、選挙管理委員会の協力のもと、体育館を使った模擬投票が行われる。主権者を育てるのは家庭科も同様である。生徒には、主体的に社会を形成する意識を持ってもらいたい、そのためには家庭科では何ができるかを模索した実践である。

道民の会が2015年に実施した高校生アンケートの結果が紹介される。社会問題に関心なし、の回答は1997年調査時の18%から6%に激減している。関心のある社会問題のトップは、前回の「環境」14%から「戦争と平和」19%になる。社会は変えられるかもしれないと思う高校生は全国平均より北海道が高い割合だった。これは高校生の社会への関心の高さをあらわすものだ。

2年生情報ビジネス科の生活デザインの授業で、消費者教育に焦点を当て、主権者教育の視点を取り入れた1時間の授業を実践する。ここではアメリカで2010年に実際に起こった出来事を取り上げる。ある家が火事になった。消防署に連絡するが消防隊は来ない。どんどん燃えて隣家に燃え移る。やっと出動がある。が、消火活動は隣家のみ。結局この家は全焼してしまう。いったいこれはどうしたことか。班で意見をまとめて発表する。10班のうち2班から「税金を払っていなかったから」との声が出る。「外国だと日本のようにはいかない」「そうなんだな」などの感想が出される。それが当たり前とと思っていたことが、税金によって賄われていることを再認識したようである。このあとは、小～高の年間教育費が、子ども一人あたり85～100万円近くかかると聞き、税金がなかったらどうなる？の問いかけをヒントに、地域ではどんなことに税金が使われるのかを考えていく。

実際の事例を用いたことで、真剣に「なぜ？」と考える姿が見られた。グループで様々な意見を出し合い他班からはまた違った意見を聞いた。様々な意見に触れる貴重な場が持てたとのことだった。

それにしても、税を負担してこそその公共サービスだ、とのアメリカの事例には驚く。優先順位が違うのでは？と言いたくなる経済感覚を持ったり、経済生活をほどよいバランスで営むことができない人はいる。お金に対する学習が十分行われてきたわけではない。税金について学んだ経験はどれだけあるのだろうか。家計と国民経済の関係図が家庭総合の教科書には掲載されているが適切な図と言えるだろうか。さらに、格差是正のための再分配の学習は社会科でも不十分ではないのか。そもそも格差はなぜ起こっているのか。税がどう必要なのかを理解することと、その税の使われ方を監視すること、その双方が必要ではないかなどが話し合われた。

2. 失敗から学ぶ—生徒会活動から見えてきた家庭科の指導—

岩佐 美和子（北海道雄武高等学校）

2015年4月から2016年9月の期間に生徒会顧問を担当する。生徒の自主性、リーダー性、責任感を、どのように自治活動を通して育むか、次々と起こる問題に対する生徒の向き合い方と教師の取り組み、そこでの出来事を総括しながら、家庭科指導のあり方を再考していった実践である。

執行部経験者がゼロの中でスタートした生徒会。2015年学校祭では、執行部はクラスごとのパフォーマンスを2クラス合同で行うことを提案する。大反対に遭うが僅差で合同が決まる。合同クラスの一つが、山車用資材として配付した材料を別用途に転用し下の学年にも手伝わせる、という問題が起こる。責任者としてこれをどう考えどう対応するのか、遅くまで議論する。出した結論には感心する。理がありかつ柔軟である。9月の新執行部には継続メンバーに新メンバーが加わる。12月の体育祭で、優勝クラスが決まったその日の放課後に得点の集計ミスがわかる。優勝は別のクラスだ。この結果をどうするか話し合う。集計担当の委員会が当該クラスに出向き謝罪を行う。クラスは笑って受け止めてくれる。他にも次々と「事件」が起こる。

調理に関わる企画もある。2月の「1, 2学年フェスタ」で次年度模擬店のクオリティ向上をめざし、焼きそばづくりを企画する。4種の麺（蒸し麺、うどん、スパゲッティ、そうめん）のいずれかと、その他の食品をトランプで勝った順に取り、どんな料理にするか考え、調理するというもの。元祖は「料理の鉄人」か？ところで「家庭総合」は1, 2年に置かれ、食物領域を2年生で学習する。1時間実習が4回、2時間連続実習が5回ほどある。フェスタでは、調理を学習した2年生が1年生に指示を出している。何をしてよいのか全く動けない1年生がいる。いつも教員が指示を出す調理実習とは違った展開だ。「家庭科の先生、大変ですね」と同僚には声をかけられたが、試行錯誤の生徒の様子に、むしろ失敗から学ぶ姿を読み取る。

2016年9月には、「自分が変わりたい」「新しいことチャレンジしたい」と生徒会立候補希望者が超過するほどになる。約1年半にわたる生徒会指導では、「新しいことにチャレンジさせる」「失敗はさせて、乗り越えさせる」「原案づくりにはとことん付き合う」を大切にしてきた。この期間、次々と起こる問題に対して、生徒会としてそれをどのように受け止め、

どのような対応策を打ち出すのか、執行部としての責任をどのように果たしていくのか、これを常に生徒に問い返しながらか成長を促していく様子には、学校が子どもの成長の場であることをしみじみと確認する思いがする。

子どもは一番大変なところと一緒に乗り越えてあげると変わる、との話もあった。家庭科指導では、これまで失敗させない指導が中心だったが、生徒会活動の経験によって、「失敗」からとことん学ぶことの必要に目を向けるようになったと報告された。

3. 「高齢社会」をどう教えるか

岩佐 美和子（北海道雄武高等学校）

高校生が介護を進路に選ばなくなっている。介護関係の専門学校進学者はこの5年間でわずかに1名である。高齢社会の分野の授業をどのように作り上げるか、1年生の9～10月に行った実践報告である。

授業は次のように進んでいく。①〈高齢者と関わる〉高齢者イメージを出し合う。身体的か、精神的か、その他に分類分けし、老化の特徴を確認する。その後次の体験実習をおこなう。手袋をつけた手で箸を持ち「小豆つまみ」を試みる。さらに手袋の上から指をセロハンテープで固定してみる。「白内障・視野狭窄メガネ」をつけてみる。こうして身体的ハンディを体感する。②〈高齢者の生活と課題〉高齢者世帯、介護者の状況をグラフから読み取る。50年後の自分の暮らし（どこで誰と、仕事は、趣味は、食生活は、健康状態は）を想像する。一番大切と思うのはお金と家族が多い。③〈人間の尊厳とケア〉友人同士で介助体験を行う。介助される側は目をつぶりゼリーを食べさせてもらう。「信頼した人でないと怖い」「何も言われず口にくるとき、少しびっくりした。声をかけてくれたら少し安心できる」「やっぱり怖い」「自分の食べる量と食べさせてもらう量が全然違った」などの感想がでる。嚥下反射を誘発させる目的のアイスマッサージも体験してみる。次いで「ユマチュード」というフランスで開発された認知症のケア手法の映像を視聴する。根底にあるのは尊厳ある人間同士として相手に接することだろう。④〈高齢化社会の課題と福祉〉グループに分かれて、道内各地と都道府県の高齢化率のデータからその数字の背景を予想する。

今後は3月の社会保障や福祉を考える授業につなげる予定である。不安だ、どうしよう、だけでは終わらせない授業にしたい、との願いが込められている。

道内各地の高齢化率が列挙された一覧表は強いインパクトがある。高齢化率の高い地域では、子どもが高校に進学する年齢になると、いずれは田もなくなるし、と一家で札幌に出る場合がある、産業の問題とも関わっている、高齢化を少子化とのセットで捉えることの問題、少子化問題の解消策を性急に求めないことが必要、5年後、10年後にどうしたいか、どんな社会になっていったらよいのかと合わせて考えたい、等の声が出された。

4. 問題提示

石川 幸孝（北海道札幌工業高等学校定時制）

「レポートではありませんが」とのことだったが、これまで5年間担任をした中で見えてきたことが提示された。

初任校、前任校の18年間は、専門学科の専門科目・学校設定科目に携わり、普通教科と

しての家庭科への関わりは少なかった。現任校の5年間は普通教科として授業を創ることを目標としてきた。問題提示は次の5点である。①他教科との協力あるいは連携・協同は現実的に可能なのか。(もちろん協力し合えばよいが、話し合いが難しい。「保健」は担当教師によって中身が全く異なり、連携をとるのは困難である。)②発達遅延・障害生徒への指導の特殊性は何か。(ある生徒は調理師になりたいと思っている。母親が非常に熱心である。ある生徒は見たいテレビがあるとアルバイト先から帰ってしまう。教師側も、まあいいんじゃないか、とこれを容認してしまうこともある。4年間の学校生活では差が大きく出てしまう。)③世代間における生活の意味・価値の差異をどう扱うか。(人の立場を想像できるか。できないと受け身のままやらされるか、どうせ必要ないと拒否してしまう。これをどう扱ったらよいか。)④“主権者教育”を家庭科で扱うことの是非。⑤情報(新たな見解・知識)をどう扱うか。(2015年に日本食品標準成分表7訂が出たが、ひじきの鉄含有量が訂正された。「日本人の食事摂取基準」も変更されている。しかし現在もひじきで鉄分の補給は可と書かれたままである。)

①について中学校で社会科と連携した参加者からは、社会科は枠組みを、家庭科は具体的な手立てから、②については、できたことから始めさらにサポートしてまたできたことから、しかしまたいやになる、を繰り返す。卒業時に人生に希望が持てるかと長い目で見る必要がある、との話があった。③に関連しては次の通り。勤務校は工業高校で工業の専門科目は個人作業が中心となる。一方家庭科はチーム作業がある。調理実習に一度も出席しない生徒、面倒くさいから、という生徒もいる。生徒が出なくなり大会参加できなくなった部活がある。世代間ギャップについては、生活を豊かにする基準が違うのではと感じている、歯がゆさは分かるとの声があがった。

5. 「子どもの貧困」観について

S A (北海道教育大学4年)

いま貧困は教育実践上の重要課題である。卒論で取り組んでいる「子どもの貧困」についてこれまで考察してきたことを中心に報告したものである。

大学の1年次から現在まで、週1回児童会館で行う学習支援「まなべえ」(生活保護受給世帯の中学生を対象とした札幌まなびのサポート事業。2015年からは就学援助を受けている家庭も対象となる)の学生サポーターをしてきた。将来の夢はYoutuberと言っていた子ども、数学を教えていたとき「将来何の役に立つんだ。だから分からなくてもいい」と言っていた子どもが印象に残っている。絵の上手な中学生がいて、ポスターコンテストの参加を勧めたことがある。家に色を塗る道具がないと言う。家で食事を済ませて参加し、通常の文房具は持っている中学生である。このやりとりの時、相対的貧困としての「子どもの貧困」問題が見えた気がした。

NHKのニュース7が8月に子どもの貧困を特集した。ところが番組に登場した女子高生の持ち物を発端に、ネットでバッシングが展開される騒ぎとなる。いったい何が見え何が見えていないのか? 相対的貧困下の暮らしは見えにくく、何かの形で見えたときには贅沢と思われる。貧困は経済的困難だけに終わらず、様々な要因が複合的に絡み合っていることを知らない人が多いのではないか。

家が無い経験をした友人がいる。友人は母親の職場にしばらく寝泊まりし、その後アパー

トを借りた後も身の周りの品々はバザーなどで手に入れていた。後ろ向きになった時に前を向かせてくれる人がいたこと、貧乏でも環境が豊かだったことが宝だ、と友人は言う。学校や教師は、友人にとってどのような意味を持っていたのか聞いてみる。教師は夢を応援してくれる人。家で幸福感が満たされない子どもが次に頼るのは学校。教師は平等であってほしいから特別扱いもしてほしくないが、ここは家とは違って思える空間をつくるのが教師では。楽しいが一番。いつも笑っていてほしい。大人の笑顔は子どもには魅力的だったりするから、との答えだった。今後は、児童必需品調査をもとに教員養成大学生の子どもの貧困観を明らかにする予定である。

学生サポーターの経験に関心が集まった。郡部より都市部の貧困がより深刻ではないのかとの話も出た。「朝、魚釣って食べてきたさ」という子どもがいたり、祖父から受け継いだ家に済んでいる、などは郡部の例である。児童必需品調査の結果をぜひ知りたいとの声もあがった。

6. ミニ児童会館の家庭科的活動の紹介―「食」の活動・・・栽培・料理（お菓子）、「衣」の活動・・・編み物・染めもの―

AK（北海道教育大学4年）

社会人学生として、学業の傍ら札幌市内の小学校に付設したミニ児童会館で、子どものための温かい居場所づくりを目指して活動している。ここではそうした活動のうち、特に家庭科的な性格を持つ「食」と「衣」の活動内容が紹介された。

札幌市は全国的にも児童館（札幌市では「児童会館」）が充実していることが知られている。児童会館（単館）は104館、ミニ児童会館（小学校に付設）はここ数年間で増え97館ある。Sミニ児童会館では、2016年は1年生から6年生までの計62名がクラブ員として在籍し、行事の時には参加者が100名を超えることもある。異年齢間のコミュニケーションが豊かで、年長者のやり方をまねて年少者の面倒を見る様子が見られる。百人一首やダンスなどのクラブ活動、キャンプや遠足などの野外活動、自主活動として各種スポーツや子ども運営委員会、お祭りや他館との合同行事など、多彩な活動が行われている。

さて、「食」の活動である。1年間を通して栽培とおやつ作りをする。小学校の畑の隣に児童会館専用の「畑」（プランター）がある。4月にジャガイモの種芋とミニトマトの苗を植える。館長から土作り、肥料の入れ方、植え方を教わる。種芋を丁寧に植えて水やりをする。トマトには支柱を立てる。10月にはジャガイモを収穫する。写真からは掘り起こした子どもの歓声が聞こえてきそうだ。収穫したジャガイモでニョッキを作る。参加人数は33名。朝から玉葱のみじん切りをする。高学年は低学年に包丁やピューラーの使い方を教えている。低学年がジャガイモをつぶしているボウルを高学年がさりげなく押さえている。ニョッキの形は自由にしたいとの声で、なめこ、ハート、ボールなど様々な形ができる。高学年が率先してしめじや玉葱を炒める。ゆであがったニョッキに、これもおいしく出来上がったトマトソースをかけて皆で食べる。

「衣」では、1月に職員手製の編み機（楕円形の変形リリヤン編み機のような）を使って、マフラーをつくる。40名が参加し、午前と午後の2回に分ける。早い子どもは1日で仕上げ。翌日のTDL家族旅行に身につけていった子どもがいた。冬休み明けにマフラーをしてくる子どもも多かった。冬休みの課題として提出する子どももいた。この他にもハンカチ

の絞り染めをしたり、バレンタインのクッキーを作ったり。他館の例では、玉葱の皮を使って染色しランチマットをつくったり、お茶会を催すなどもある。

こんなにも家庭科実習に関わる活動があることに驚く。児童会館の活動はもっと知られるべきだが、まだまだ知られていない。児童会館に通う際の条件は特になく、(年間保険 1500 円以外は) 費用はかからないことなども紹介された。課題は?との質問に、Sミニ児童会館は今年 38 名が新たにクラブ員になったが、専用の部屋は 1 教室のみで、弁当を食べたり自由遊びをするのはこの部屋である(特別な場合は隣室の特別教室を使わせてもらってはいるが)、本当に狭い、との話があった。条件整備にも多くの課題がある。様々な場所で子ども支援はおこなわれている。児童会館は、ますます重要な子どもの居場所になっていく。

7. 家庭科教育ゼミ実践

MA (北海道教育大学 3 年)

大学農場の一面をゼミで借用し、ゼミ活動の一環として作物を育ててきた。4 月からの活動報告である。

大学農場では栽培学の実習で輪作用のトウモロコシ、ジャガイモ、ダイズを栽培している。4 月に専門の教員から土壌・肥料・病気など基礎的なレクチャーを受け、今年度のゼミ栽培品種を、ダイズ、ミニトマト、パプリカ、玉葱、葱、苺、ラズベリー、かぼちゃに決定、担当者を決めて栽培方法を確認する。栽培学との共同作業で畑全体に豚糞(牛糞に比べ臭いがしない)を撒き、後日トラクターが入る。さらに石灰を撒き、5 月中旬から植え付けを始める。大学近くの種苗店のゴッドマザーに、「昔は種を着物の懐に入れて暖め発芽させたものだ」と聞き、さっそくやってみる。湿らせた脱脂綿に包みビニール袋に入れておなかに入れたり、陽の当たるガラス窓に貼り付けてみる。同時期に、綿花の種を名古屋のトヨタ産業技術記念館から手に入れたが、これも同様の方法で発芽させる。こちらの発芽率は低かったが、どうにか苗に育て植え付ける。

今年の大問題は、例年はうまく育っていたダイズが全滅したこと。今年はダイズが不作の年とも言われてはいたが、ゼミの畑ではほんの数粒を残しほぼ全滅した。原因は 10 メートルほど離れた他の授業の区画で栽培したダイズに農薬が使用されたため、こちらに虫が集まったことにある。農薬使用の畑のダイズは丸々と実っていたが、こちらはほとんど虫食いの穴あき状態か成長不良だった。出来の違いに愕然となる。

参加者から農薬対策についてのアドバイスをもらう。さすがに家庭科の先生方は農薬対策の経験を積まれている。区画のもっとも外側に垣根のように植えて虫を食い止める、マリーゴールドを植える、ハーブもよいが、かえって虫が付くものもある、他の分科会の先生からも区画の外側にネットを張って防除することができるという。参加者が栽培してきたものは、落花生、サツマイモ、スイートコーン、ジャガイモ、かぼちゃ等。かつては北海道では育たなかったサツマイモだが、マルチ栽培によるサツマイモの収穫がたいへん良好だと聞き、驚く。

栽培は人間教育だ、この体験を通して根気強さを身につけたり、また和んだりやさしくなったりする、との声が出る。栽培はさらにどのような意味をもつのだろうか。参加者がかつて赴任した農業が盛んな地域の学校では、子どもが野菜を大切にしていた。漁業地域に赴任

すると、給食の野菜残飯量の多さに驚くことになった。調理実習で三つ葉の長い茎を葉の下から切り捨ててしまう子どもがいた。一方でこんなこともあった。技術の実習生が来た。父方が農家とのことだった。当時花壇を使ってジャガイモ栽培をしていたが、収穫量がひどく悪く、子どもはがっかりしていた。実習生はアメダスから資料を取り寄せ、雨量を調べたりしてなぜ収穫量が少なかったのかを考える研究授業をおこなった。当たり前が抜け落ちていることがある。見えていないものがある、何も考えないでただ「経験」している場合がある。目の前の物が誰かとつながっていること、何のために？誰が？どのようにして？と考えることが大切である。栽培はそれを学ぶ機会となる。

Ⅲ おわりに

朝起きて何百kmもの道を運転して分科会に参加する先生方。終わるとまた同じ道を運転し翌日は朝早くから勤務する。学生の一人がこれを聞いて心底驚いていた。

今年の分科会では、18歳選挙権の成立以後、子どもが主権者として成長していくための家庭科実践とはどうあるべきかという報告、生徒会自治活動を通した高校生の成長と家庭科指導を重ねた報告、高齢社会の学習をどう展開するかという報告、これまでの実践を総括して問題提起した報告、そして学生からの報告もあった。社会の今を映し出す実践であり、かつ重い課題を含んでいる。

学生報告を受けて、学生サポーターや児童会館の支援員ら学校外で多くの人が子どもに関わっていることを知った、教師が諦めてはいけない、との声もあった。

この3月末に改訂学習指導要領が公表された。2月公表の「案」にはなかった高齢者介護が、中学校技術・家庭科の家庭分野に加えられている。高齢者も少子化も税金も、取り上げ方によって全く異なるメッセージを送ることになる。私的領域を対象とする教科の内容は、政策的に「活用」されうるという問題と常に隣り合わせにある。

この教科がもつ、現代的課題に身体ごと相対する魅力を大切にしつつ、これまでの家庭科教育実践の蓄積に再び学びながら、家庭科を学ぶ意味を常に問い続けていく必要を強く思った。